


申請者	学科名	造形デザイン学科	職名	教授	氏名	山下 明美
調査研究課題	博物館の価値発信を支援するデザインに関する研究					
調査研究組織	氏名		所属・職		専門分野	役割分担
	代表	山下明美	造形デザイン・教授		色彩デザイン	調査研究
調査研究実績 の概要	<p>本研究では、博物館の価値発信をデザインの視点から支援するために、ミュージアムショップの調査とオリジナルグッズの開発に取り組んだ。</p> <p>(1) 事例調査 主な調査視察先： 京都国立博物館（京都） 石川県立歴史博物館（石川） 京都文化博物館（京都） 石川県立伝統産業工芸館（石川） 美術館「えき」KYOTO（京都） 金沢21世紀美術館（石川） 北海道大学博物館（札幌） グランフロントナレッジキャピタル（大阪） 国立科学博物館（東京） 西宮市大谷記念美術館(兵庫) 江戸東京博物館（東京） うらわ美術館（埼玉） 21_21デザインサイト（東京） 岡山県立博物館（岡山） 愛知県立博物館（名古屋） 岡山県立美術館（岡山） 名古屋市科学館（名古屋） 倉敷自然史博物館（岡山）</p> <p>(2) 調査の考察と開発提案 ①現地調査 まず、国立から市立、民営まで様々な規模とタイプの博物館のミュージアムショップを調査した。文献調査等でも明らかであるが、多くのミュージアムショップの運営やオリジナルグッズの開発は民間の専門業者に業務委託をしている。また、企画展や特別展では、常設で販売されているグッズとは別にその展示ごとのミュージアムグッズが扱われる。本研究では常設のグッズのうちでも館の特色を打ち出すオリジナルグッズに焦点をあてた。調査した中では、特に京都国立博物館、北海道大学博物館のグッズの商品企画やショップの展開には学ぶことが多くあった。また、地方の自治体が運営する館ではオリジナルグッズにかかる予算も限られていることから、オリジナルティや品揃えなどに課題を抱えていることが確認できた。</p> <p>②小規模の博物館向けのオリジナルグッズの開発と提案 自然科学系の博物館のミュージアムショップでの販売を想定したグッズを企画・開発した。また、歴史資料系の地域博物館におけるオリジナルミュージアムグッズの開発提案は1年の平面構成演習と2年の色彩改革演習において、演習課題に取り入れた。</p>					
						
図1 京都国立博物館						

調査研究実績
の概要



図2 北海道大学博物館



図3 演習での取り組み

(3) 関連学会での研究発表

自然科学系の博物館向けのミュージアムグッズの提案：

かねてより研究を続行しているチョウ目の完全変態による配色とパターンの変化から応用展開したパターンを使ったミュージアムグッズの企画・提案について、日本色彩学会全国大会2016名古屋でカラーデザインとしてポスター発表とプロトタイプの展示を行った。

(4) 研究成果のまとめと考察

①まとめ

ミュージアムショップやグッズが博物館や美術館の魅力や情報発信に寄与していることは視察調査によって確認されたが、一方で館独自のグッズ開発には様々な課題を抱えていることも分かった。特に地方の公立の博物館等では、その開発にあたる専任のスタッフがいないことや、予算や規模の関係で、品揃えが十分ではないことや独自に開発しても生産ロットが少ないため、高価格になってしまうなどの問題も抱えている。館の魅力発信のためには、展示企画はもとより、付帯する施設（ミュージアムショップ、カフェ、レストランなど）が相乗効果を成すような仕組み作りも重要であり、そこにデザインが関与することで支援できる可能性があることが示唆された。

教育的な成果の一つとして、現地調査や資料収集で博物館の使命や魅力を発見するなど、これまであまり関心を持たれていなかった地域の博物館について考察する機会が得られた。

②OPUフォーラムでの発表

本研究の成果とまとめをOPUフォーラム2017にてポスター発表を予定している。

(5) 今後の課題

今年度は、専門とする色彩研究を活かした自然科学系の博物館向けのグッズの開発提案を重点的に行ったが、次年度では今年度の調査研究で明らかにされた課題を踏まえ、地方の博物館や美術館を対象として、地域の素材を活かしたグッズ開発の研究に取り組み、その魅力を発信する支援を続けていきたい。